
庭師と魔女

清村 聖樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

庭師と魔女

【コード】

N9496N

【作者名】

清村 聖樹

【あらすじ】

自称魔女の森で暮らし薬草を煎じる幼馴染の少女に振り回される庭師の青年の物語。

察しの悪いヘタレ青年と素直になれないツンデレ魔女少女、どこかずれた二人はすれ違いながらも互いを追いかけ合う。

プロローグ

みなさんはじめまして、僕はランドルフ・フェンダー、庭師をしています。庭師って言うのは庭を造る人のことで庭石や樹木や池、水路や芝とか庭を一つの造形空間として設計施工、製作したり、他にも樹木とか植物の生育や定期的に剪定して管理したり、要するに庭の専門家の事です。

まだまだ半人前だけど、そんな庭師の僕は、今日みたいな麗らかな昼下がり、空は雲ひとつない快晴で風は穏やか、夏口の天気としては幾分涼しくて過ごしやすいこんな日には、庭木の手入れやたまり始めている花壇の草むしり、ハーブを摘んで乾燥させたりしたいなあ、とか思うんですが………僕はなぜ、断崖絶壁を命綱一本でぶら下がっているのでしょうか。

「ちょっと、ドルフ、ランドルフ！ 何ぼんやりしてるのよ、早く下りて薬草採ってきてよ！！」

「そ、そんなに急かさないでよレティーシャ、見てよこの谷底、下が見えないんだよ？！ 落ちたら僕死んじゃうよっ」

「あなたの泣き言なんてどうでもいいのよ、私が欲しいのは薬草よ、や・く・そ・う！ この谷に生えてる『アカラミミゴケ』が欲しいの、さっさと行きなさいよ、この弱虫　　っ」

「ちょ、まっ、レティやめて、命綱揺らさないで、うわあああ！」

絶壁の中ほどでブラブラと揺れる細い綱にしがみ付きながら僕は心の底から思った、なぜこんな事に……？

第一話

事の起こりは二年前の春、僕が16歳でガレンディア町長のお屋敷に庭師として住み込みで働き出したばかりの頃、僕が庭仕事をしていると三つ年下の幼馴染レティーシャ・ソルシエールが突然目の前に仁王立ちで現れた。

「決めたわドルフ、私、魔女になるっ」

「レ、レティっ?! どこから入って……て、魔女っ?!」

突然の宣言に僕はシャベルを片手に持ったまま、風に舞う癖のあるブラウンの髪と僕を見る勝気なグリーンの瞳をただ茫然と見つめ返していた。

昔から突拍子もない事を言う子だったけど、よりによってなんで魔女? その発想はどっから出てきたの??

僕の困惑をよそにレティーシャは喋り続けた。

「魔女になるにはやっぱり使い魔が必要だと思わない? 思うでしょう? もちろん、思うわよね。魔女の使い魔と言えば黒猫って相場は決まってるわ、でも家の猫は三毛猫だしデブだし、可愛くないし、すっごい食いしん坊でとても高潔な魔女の使い魔は勤まらないと思うの。だからね、貴方の『ガット』を貸してちょうだい! 貴方の猫なら黒猫だし大人しいし魔女の使い魔にはもってこいよ」

そう言い終わると、どうだと言わんばかりに胸を張る。

「え? いや、まあ、ガットなら小屋で寝てるから好きにしているけど、レティ魔女ってどういう……」

「これで使い魔は揃ったわ、あと魔女に必要なのは『守護騎士』ね。あのね、守護騎士っていうのはね、魔女の身に危険がないように護るのが仕事なの。魔女になるために必要な物の中でも一番大切に重要な物だから誰にでも出来る事じゃないわ。だからね、私考えたの、あなたを私の騎士にしてあげようって、どう思うドルフ」

どう思うって言われても……。

「あー……なんていうか、ありがとう？」

なんだかよくわからないけど信頼はしてくれているらしい、なんだかちょっと嬉しいって思う僕は変かな？

レティーシャはニコリと微笑んだ。

「じゃあ決まりね。貴方は今日から私の騎士よ。いいこと？ 私の騎士になったんだから私の言う事なんでも聞かなくちゃだめなのよ、私が呼んだらすぐ来るのよ、いいわね」

そう言い終わると黒猫のガットを小脇に抱えて去って行ってしまった。なんだったんだろう……ていうか、魔女ってなに？

その後、突然の魔女宣言に困惑する周囲と反対する彼女の両親の制止を振り切り、町外れの森にある小屋へとさっさと移り住んでしまった。

それからというものの、よくわからないうちにレティーシャの騎士となっていた僕は、数少ない休みの度にレティーの薬草採取に付き合われるようになった。ある時は高い木の上に、ある時は重たい岩の下、ある時は流れの速い川の中……僕は毎回、生きた心地がしなかった。

そして、今日の朝も例の如く夜も明けぬうちに僕は叩き起され、
現在に至る。

第一話（後書き）

ただいまエラー発生中にて、次話の投稿が不可能になっています。
ノ、（）。。。。

更新がしばらく途絶えそうです

第二話

「もうっ！ ドルフがぼんやりしてるから時間ばっかり食ってちつとも集まらなかつたじゃない、本当ならこの籠三つ分くらい集める予定だったのに、今からもう一度降りても今日中に家に帰れないじゃない！ せつかく遠くまで採りに来たのにつ」

命からがら薬草をとってきても『足りない』と言う無慈悲な一言で、僕は二度も谷に吊るされたが、それでもまだ足りなかつたようで、レティは心底残念そうにため息をついた。

大仕事を終えて木の下でへたり込んでいた僕はレティの顔を見上げながら苦笑いを浮かべた。

「いや、でも、きびきび動いても籠三つはちよつとむ……」

「ドルフの弱音なんて聞きたくない！ ほら、帰る準備くらいはちやっちゃとやってよ。私、野宿なんて絶対に嫌なんだから！！」

ふと見上げると太陽は真上を通り過ぎ、少しばかり傾きだしていた。

そもそもこの谷は僕らの住んでいる町から歩いて四時間以上かかる。往復だけでも八時間、山の合間を縫って歩くから日が暮れるのも早いし、夏口だとは言え山の夜は冷えるからそうそう長居も出来ないし時間的にも、もう引き返さなければいけない。

「そうだね、早くしないと夜になるし、獣が出てくるかもしれないから早く行こうか。あ、荷物は全部僕が持つから、その方が早く帰れるよ」

「当然でしょ？ 貴方は魔女である私の守護騎士なんだから荷物くらい持つのは当たり前よ」

そう言うとレティはニコリと微笑んでお昼のバスケットと水の入った水筒だけは持って、後の大荷物は僕がまとめて背負って下山した。庭師なんて力仕事してるからこの程度の荷物抱えて山登りなんて軽いもんだ。

それほど険しくは無い道のりを大きな荷物抱えてえっちらおっちら進み、時々前を歩くレティから激励の無い叱咤の嵐が飛んできた。りししながら、やっと小屋に戻った頃にはやっぱり日が暮れてしまった。やっぱり日帰りで薬草採りは難しいなあ……今度の休み、長めにとれないかなあ。

「はあ、すっかり遅くなっちゃったなあ。レティ、疲れた？ なんなら道具の片づけ僕がやっておくから家に入ってなよ」

いくら普段から森を歩きまわって体力があるって言ってもあの距離を強行軍で進めば女の子の体力では疲労も大きい。さすがのレティも元気がないみたいだ、そう言えば嵐のようだった叱咤も森に入る手前くらいから聞こえなくなったなあ。

喋るのも億劫そうなのに、レティはキッと目を吊り上げると怒ったように言った。

「ふんだ、疲れてなんかないったらっ！ 片づけぐらい一人でパパーっと出来るくらい元気いっばいなんだから！」

「そ、そう？ でも、レティ無理しない方がいいんじゃない？……顔が真っさ……」

「でも！！ ドルフがどうしても片づけをやりたいうって言うなら考えなくもないわ！」

そう言つとぶいと顔を背けてしまったが、レティの顔はほんのりと紅く染まっていた。なんだろうさっきまで青かったのに、熱でも出たのかな？

「いや、どうしてもって言うか……レティ大丈夫？ 顔があか……」

「そうっ！ どうしてもやりたいのね、そこまで言うならやらせてあげなくもないわ。ただし、きちんと綺麗にしまつてよね、次使うときに出しにくいと私が困るんだからっ！ それから、終わつたら声かけてよ、勝手に帰つたりしたら承知しなんだから」

「え？ あ、うん……わかった、ちゃんとやつとく。でも、レティ本当に大丈夫？ 顔色が……」

「じゃあ、しつかりやつてよねっ！」

まるで何か誤魔化そうとするかのように大声で言つとバスケットと水筒と今日の戦利品を持つと逃げる様に小屋へ入った。

僕はレティの行動に首をひねりながらも、とりあえず荷物を持って隣にある小さな納屋に向う事にしよう。

第二話 (後書き)

原因のよくわからないエラーが続きましたが、調べるとこの話だけがどうやってもエラーが出ると判明し、調べていつてある一行を削除したら、なんと不思議なことにエラーが消えたんですよ。(。口。；)！！　ほんとびっくりです。

なので、一行だけちよつと書き替えてやつと更新、心底ほつとします

第三話

納屋の中には収穫に使う籠に鍬や鎌、スコップなんか所狭しと置かれている。

さすがに日暮れの上に明かりも持ってないのに、この中での作業は危険過ぎ。とりあえず覚えていた物だけを何とか元のあった所にしまい、残りはリュックに入れたまま出入り口付近の壁につるしておくことにしよう、元々が遠出用の荷物だからこのままにしておいてもそれほど支障は無いはずだ。

「さてつと、こんなもんでいいかな？ あんまりいじつても逆に怒られそうだし、とりあえずレティに声かけてから帰るか」

服についた埃を払いながら納屋を出ると、すぐ隣にあるレンガ造りの小さな小屋の窓からはぼんやりとした淡い光が漏れていた。その光はひどく温かくて、なんとなく『ただいま』と言いたくなるような懐かしさで溢れていた。

小さな煙突から上る細い煙は風のない空にまっすぐに伸びていて、煙と一緒にほんのりと甘あい香りが小屋の周辺に漂い、適度に空腹な僕の腹を刺激した。

お腹、減ってきたなあ。

「レティ、片付け終わったよ。なんか他に用事無いんだったら、僕そろそろ帰……………ん？」

扉を開けて小屋に入るとそこには淹れたての紅茶と温め直されたクッキーが質素な木のテーブルに二人分並んでいて、テーブルの奥

には黒猫のガットが気だるそうに丸くなって大あくびをしていた。どうやら甘い匂いはクッキーから発せられていたらしい。

僕は二つ用意されたお茶と真つ赤な顔してテーブルに座っているレティを交互に見て、思わず顔がにやけた。

「ねえレティ、もしかしてこれって僕のぶ……」

「べ、別にドルフの為に入れたわけじゃないから！ 丁度お茶が飲みたくなって入れたらうつかり多く作っちゃっただけで、捨てるよりはドルフに飲ませた方がマシだって思っただけなんだからね」

顔を真つ赤にしながら半ば叫ぶように言うと自分の分のお茶を手に取るとぐいぐい飲み始めた。

僕はさらに頬笑みを深めながらありがとうと言ってレティの向かいに席に腰をおろしてお茶菓子のクッキーを一口齧った。

「あ、これハーブのクッキーだ。僕これ好きなんだ、ありがとうレティ」

「べ、別にドルフの好物だから焼いたわけじゃないんだから、昨日ハーブが中途半端に余っちゃってだからクッキーにしてみました……って、もうっ、いいから黙って食べなさいよ！」

「ああ、ごめんごめん、怒らないでよレティーシャ、すごく美味しいよ」

「……………当然よ」

レティはそう言うつぶいっと横を向いてしまった。

僕は苦笑いを浮かべながらレティの機嫌が直るのを、クッキーやお茶を褒めちぎりながら待つ事にするよ。

「うん、美味しいよレディ」

第四話

しばらくしてやっと機嫌の治ったレティと僕はお茶とお菓子を摘まみながら他愛も無い話をした。

レティの森での生活や薬草の話、猫のガツトの話、物置き小屋の雨漏りの話、僕はそれを頷きながら微笑んで耳を傾ける、それが昔から僕の役割だった。レティが楽しそうに話している姿を見られれば僕も嬉しい。

ふと気がつくと、窓の外に見える月は随分と高い所まで登っていた。

「もう月があんな所まで……僕、そろそろ戻らないと」

「え？ あ……うん……」

さっきまで笑っていた顔は一変してどこかしょんぼりとうなだれてしまった。ああ、やっぱり森に一人は寂しいんだろうなあ、意地張らないで街に戻ればいいのに……なんて事口が裂けても言わないけどね、すごい怒るから。

「ごめんねレティ、また時間作って顔出すから……そうだ、今度は珍しいハーブの苗持ってくるよ、香りがいいからレティもきつと気に入るよ」

「くれるんだつたら貰ってあげる……」

「うん、じゃ今度持ってくるよ。それじゃ、おやすみレティーシャ」

僕は残ったクッキーをぽいっと口に放り込んでから小屋の外へ出た。外はもう真っ暗で、今日が満月じゃなかったら明かりも無しで

帰るのは無理だっただろう。

ふと振り返るとレティは戸口に立っていて、どこか落ち着かないようにチラチラ僕を見ては何か言いたげにしていた。なんだろう何か怒らせるような事言っただけかな？

心当たりを探しながら内心ビクビクしているとレティは小さく言っただ。

「ねえドルフ、私たちもう随分長く一緒にいるわよね？」

「うん、確かにそうだけど、突然どうしたの？」

確かに僕らは結構長い付き合いだ。僕は元々流れ者でこの町に来たのも十歳の頃、放浪の途中、町はずれで一人干し芋を齧っていた時、突然目の前にレティが現れ話しかけてきたのが出会い。それから色々あって、僕はこの街に住む事になってそれからずっと一緒にいる。

レティは何か言わずらそうにつま先で土を弄りながらチラリと僕を見上げて来た。

「私……もう16よ」

「？ そうだね」

「もう成人したのよ、立派な大人よ」

「??？ そ、そうだね？」

「……なんで疑問形なのよっ」

「いや、だって、立派な大人は何年も黙って家出とかしな……」

「話の腰を折らないっ！」

「はい、すみませんっ」

折ったのは僕じゃないのに、という言葉が口の中で呟く。

僕を怒鳴りつけたレティは一度深呼吸してからピツと背筋を伸ばしたと思うと、ずいと一步踏み出すと真っ赤な顔で睨みつける様に僕を見上げてきた。

「私たち、もう十年近く一緒にいるのよ。ドルフは19で私も16、お互い将来の事とか考えてもいい時期よねっ……だから、ランドルフ・フェンダー、あなた16歳の私に何か将来について言う事があるんじゃないの？ い、今なら聞いてあげない事も無いわよっ！」
「ええっ?! と、突然そんなこと言われても……16歳のレティに言う事?? えっと、えっと……っ」

僕は腕を組み虚空を見上げ時々見苦しい言い訳を挟みつつ唸りながら必死にレティの求めているであろう『正しい答え』を考えた。

まずい、本気でわからない。

「っ~~~~っ~~~~もういつ! ドルフの馬鹿、トウヘンボク、もう知らない!!」
「え?! ちょ、なんで? レティ? ちょ、レティ待って、ねえ!」

ものすごい勢いで小屋の中へ駆け戻ったレティを慌てて追いかけたが鼻先で戸を閉められ、それから何度も呼びかけたけど返事さえしてもらえなかった。レティが怒っている理由が、分からない。なんでえ?

ただ一つ分かる事は、僕がレティの望む答えを言えなかったという事だけだった。

結局、僕がお屋敷に戻ったのは夜もだいぶ更けた頃で、当たり前

ただ閉門には間に合わず僕は閉め出されてしまった。

仕方が無いからこそそこそと泥棒のように扉をよじ登って越える羽目になったけど、ほんと誰にも見つからなくてよかった……下手すると減俸じゃすまない。

僕は庭小屋へ滑り込んでようやくホツとした。僕の住むのは庭の端にひっそりと建っている小屋で、小さな寝床と仕事で使う備品だけが置いてあるだけの小さな場所。元々納屋だった小屋に無理を言っつて寝床を置かせてもらっているのだ。

僕は基本的に雨風がしのげれば満足だから、一人で静かに草木の音を聞きながら眠るのが一番性に合うんだ。

流れ者でたった一人で旅をしてきた僕には、慣れ親しんだ野宿が一番いい環境なのだ。

干し草を詰めたマットレスに倒れ込むように寝転がり、靴と荷物を床に放り投げるとようやく一息ついた。

それにしても、くたびれたなあ。今日はもう、本当に静かに寝よう。谷も疲れたけど、何よりも最後の最後でのレティの怒り、僕には彼女が何を怒っているのか分からない。僕はレティの守護騎士なんだ、レティの為なら何だってやってあげるのに……レティの求めている物が僕にはわからない。

僕はぐるぐると堂々巡りを始めた思考を止める様に目を閉じた。耳に聞こえるのはさわさわと鳴る草木の音だけで、それが子守唄のように心地よく僕の耳に響いてきた。

そして僕は穏やかな音に包まれ、いつのまにか夢も見ないほどの深い眠りへとおちていた。

第五話

あの魔の休日から数日が経過し、僕は午前中に猛烈な勢いで大仕事を終わらせて土下座する勢いで半休をもぎ取り、レティに約束したハーブを届けるという名目で様子を見に行く事にした。

この間、あんな別れ方をしたせいか、どうにも仕事に身が入らなくて失敗三昧、昨日は剪定する枝を間違えるという初歩的なミスをして親方から凄まじい拳骨を喰らったばかりだ。

僕はハーブの苗が入った小さい籠を片手に、夕飯の買い物客などでそこそこ賑わった通りをゆっくりと森へ向かった。

突然肩を叩かれたのは賑やかな通りもそろそろ終わろうかと言う場所だった。

振り返るとそこには質素だが仕立てのいい服に身を包んだ小柄な初老の男性が立っていた。元々色素の薄かった髪は年齢を重ねるとともに艶と潤いを失い、下がった目じりはどこか優しげな雰囲気醸し出し、顔に刻まれた皺は年輪の如く生きた年月を想わせた。

「よう、ドルフ坊、久しぶりだなあ」

「ホフマンさん、こんにちは、どうもご無沙汰しちゃってすみません」

僕はそう言って苦笑いを浮かべバリバリと頭をかく。

彼は薬屋の店主でピリー・ホフマンさん、流れ者だった僕を引き

取り庭師として必要な知識の全てを教え育ててくれた恩人で、僕の第二の父のような人だ。あ、ちなみに第一の父の事は聞かないでね、僕もあの人の消息は知らないんだ。

第二の父、ホフマンさんは愉快そうに笑うと僕の背中を豪快にバンバン叩いた。ちよつと、痛い。

「なあに、便りが無いのは元気な証拠つてな！ どうだ、ガレンデイアんとこの庭は？ 仕事な慣れたか？」

「いや、さすが町長さんの家つて感じですよ、珍しい樹木が多くて扱いを覚えるのだけで精一杯ですよ」

「そうかそうかあ、あいつんちの庭も学ぶ事も多くて大変だろうがなあ坊、お前には天賦の才がある、しっかり学べば王宮庭師になるのだつて夢じゃねえと俺は思ってるんだぜ」

王宮庭師とは、僕自身はあまり興味も無いのだが庭師なら誰もが憧れ一度は夢見る庭師たちの頂点だ。ホフマンさんも若い頃は王宮目指して修行していたと言うが、庭師よりも薬師としての才能の方が勝つて泣く泣く諦めたのだと言っていた。

「いやだな、買い被りすぎですよ。僕は、王宮みたいな豪華で忙しい所よりも、そうですねえ、どっかの公園とか民家の庭とか……そう言う細々とした所をやっけていきたいんです」

上流階級とやらの見栄やエゴの詰まった庭なんて僕は興味がない。むしろ、あんなに不自然で見た目の華美ばかりを追求して無理やり育てられた樹木を見ると心が痛むくらいだよ。

「相変わらず坊は欲がねえなあ……ま、俺としても王宮庭師になるよりもソルシエールんところのじゃじゃ馬を嫁さんにもらつて俺の

跡でも継いでほしいってのもあんだけどな」

「ええっ?! ちょ、何を言い出すんですか、いや、まあ、レティが嫌いだとか言うんじゃないで、なんていうか僕的にありかなあとか思わなくもないですけど、やっぱりそこにはレティの意志っていうか、レティにも選ぶ権利があるっていうか……と、とにかく! 僕とレティはそんなんじゃないんですっつたら!」

ホフマンさんは慌てて否定する僕を見てからかっているのか、ニヤニヤ笑いながら肩に手をまわしてきた。

「何言っただはこつちのセリフだぜ? 坊、お前が一月に何度もねえ休みに朝からいそいそソルシエールのじゃじゃ馬に会いに行ってるって、俺が知らないでも思っただのか? ん? それに、この前の休みは閉門までに帰らず、塀を乗り越えてたそうじゃねえか……坊よお、これでもまだ白あ切る気か?」

「なぜ、それをつ!? 内通者は誰ですか!」

ホフマンさんはニヤニヤ笑うだけで質問には答えない。くそ、本当に誰なんだ、この酔っ払いのように管巻いて絡んでくるオッサンに僕のプライバシーをバンバン漏らしている奴はっ! 見つけ次第そいつの寝床に毛虫仕込んでやる。精々かぶれて苦しめばいいんだあ!

「そんなに照れるなよ、ドルフ坊。俺としちゃ本当に嬉しいんだぜ? ソルシエールとこのじゃじゃ馬は先代の婆様に似て、そりゃあ腕のいい薬師だ。今だって難しい薬を創っては俺のところに持ってきやがる……お前の栽培の技術とじゃじゃ馬の薬師の腕がありゃあ前、店のチェーン展開だつて夢じゃないっ! ふはははは、目指すは王都進出!」

空を見上げうつとりと眼を細め小さくため息をつく養父の姿。

「王都進出って、また大きく出ましたねえホフマンさん。でも、貴方の腕なら自力で王都に出るのだからって難しくないじゃないですか、こんな田舎の薬屋にしとくのは勿体無いくらいの腕ですよ、現にいろんな所から引き抜きの話が来てるのに、まったく贅沢ですねえ」

褒められてまんざらでもない養父は、照れくさそうに頬をかいてから、苦笑いを浮かべ小さく首を横に振った。

「俺なんて若い頃から血反吐はくまで努力したがソルシエールの婆様じゃ逆立ちしたって叶わなかった。今だって、薬師様、先生様なんて呼ばれててもソルシエールのじゃじゃ馬娘の天性の腕には敵わなねえ、あと数年もすりゃあ俺はお役御免にならあ」

「ホフマンさん……」

養父は小さくため息をついて口の端だけを持ち上げて寂しそうに笑った。

この人は、努力を惜しまない人だ、でも、この人の周りにはあまりにも『天才』が多すぎた。決して追いつけない背中をこの人は痛いほど見て来た、庭師としては兄弟子『レイモンド』の影に隠れ芽が出ず、代わりに兄弟子は師匠の覚えも善く僅か38でこの世を去るまで王宮庭師として名を馳せ、薬師としては師と仰いだ麗しき森の賢者『エリーシャ・ソルシエール』の才能には毛ほども敵わなかったと言う。

「俺はよ、今のままでいいんだ。もう年だし、新しい事をするには時間も体力もねえ……薬草一つ自分で採りに行けねえ。それに代わってじゃじゃ馬は元気だよなあ、あの子もよお結構まめに薬卸しに

来るんだが、その度に『アカラミミゴケはどこに生えてる』だ『エ
ンジャクキノコの群生してそうな所はどこだ』だの薬草の生息地ば
かり聞きやがる」

養父が指折り数える薬草の名前は、どれも僕がレテイと採りに行
った薬草の数々だった。深い谷や冷たく流れの速い川が頭をよぎっ
ては冷や汗が浮かんだ。あれはまさしく悪夢の日々つ。

「この前だつてよ、火焰草の生息場所を教えろつて、そりゃあすこ
い剣幕で……」

脳裏によぎる日々を追い払う事に集中していた僕は、ぼんやりと
養父が最後に行った言葉を聞いて耳を疑い眼を見開いた。

「ホフマンさん、今なんて言いましたっ?!」

「え? いやだから、薬草の生息地を聞きやがるつて……」

「違います、その後です!」

「あ? 火焰草の事か?」

「レテイに『フロガの森』の場所を教えたんですかっ?! あんな
危ない場所、いつ教えたんです!?!」

「いつつて……四、五日くらい前だったか? なんかもずかつた
か? てつきりお前と一緒に行くもんだとばかり……」

養父は怪訝に顔をしかめ、自分の発言の非を首をかしげながら考
えていた。

「そんなわけないでしょうっ。まとまった休みの取れない僕が、日
帰りも出来ない場所に行けるわけないでしょうっ!?!」

僕は半ば絶叫しながら目の前が真っ白になった。

火焰草はとても特殊な薬草で、扱いは難しく調合も極めて繊細な作業を要求する、一歩間違えれば僅かな量で命さえ奪ってしまうほど非常に強い薬草だ。レティがなぜ火焰草を欲しがっているのかわからないけど、あれは薬草自体の問題よりも生えている場所が一番の問題で、地形が不安定で凶暴な野生動物も多く危険で採取が難しい事から市場には滅多に上がらないのだ。

「すみません、ホフマンさん。僕、急用が出来たのでこれで失礼します！ 今度、必ずお店に顔出しますから！！」

「え？ あ、おい、どうしたんだ、坊？ 坊っ！？」

後ろから養父の声が何度か聞こえたが、そんなものすでに耳に入るわけもなく、僕は人とぶつかるのも構わず全力で街の外を目指して走り抜けた。

頭の中をよくない考えが廻った、どうかそれが取り越し苦労だったらいんだけど、レティの性格を考えると……いや、今は何よりレティの小屋へ向かうのが先決だ。

駆けこんだ森の中の小さな小屋は静かで痛いほどの沈黙に包まれていた。

「レティ、いないの?! レティ、レティーシャ!! くそっ、やっぱいいない……ガット、おい、ガットいないのか?!」

小屋の中をレティと飼い猫の名を呼びながらありとあらゆる場所を見たが、レティはおるか黒猫も見つからず、納屋を覗き込むと案の定、遠出用の荷物がいくつか無くなっていた。

「レティどころかガットもない。あの怠け者がいないってことは、レティが連れてったのか、ならもう出掛けた後か……早く追いかけなきゃっ」

僕は全速力で屋敷に駆け戻り、執事長に土下座して休みを前借し数日間の自由を手に入れてから幾ばくかの食糧をもち、有り金のほとんどを使って早馬一頭を借りて僕は文字通り街を飛び出した。

火焰草の生息地は早馬を潰す覚悟で飛ばして休まず進んでも二日はかかる、レティが火焰草の事を聞いたのが四日前、いつ出たのか分からないけど、どうか間に合ってたっ！

第六話

馬を潰さないギリギリの強行軍で三日、僕は森の入口にまでたどり着いた。通る宿場という宿場でレティの足跡を辿り、一番近くの宿場町で黒猫を連れた少女が森の方へ歩いて行ったという話を聞いたのは、少女が森に向かったのは僅か一日前の事だった。

間に合わなかった事は悔しかったが、そう落ち込んでもいられない。僕は疲れ切った馬を宿場に預け僅かな食糧だけ買い足しすぐさま森に向かった。

森の入口は鬱蒼としていた。人の往来の無くなった林道は手入れもされず伸び放題の草木のせいで昼間だと言うのに薄暗く、僅かに残る道の形跡さえ、まるで侵入者を拒むかのように雑草に覆われ僕のゆく手を阻む。

僕は目を閉じて耳をすませよう、さやさやと鳴る森の音、きらきら舞い落ちつ光、獣たちの息遣いが僕の耳にしんと響く、どうか教えて彼女はどこにいる。

「どうか無事でいてお願い、無茶な事だけはしないでっ」
すませた耳に、森の奥から微かな鳥たちのざわめきが聞こえてきた。見慣れない侵入者に警戒して鳴きあっているのだろう、かなり遠いようだが大まかな方向が分かった。

「よし、見つけたっ！」

僕は荷物を背負い直し、森の奥へ足早に進んだ。おそらく道から

離れてはいないはず、草が多く歩きずらいが帰りに迷う事はない、レティは必ずこの道の先に居るはずだ、鳥たちの声もそれを裏付けるように道の奥から聞こえてくる。

進むほどに森は薄暗くなり、森のざわめきも大きくなった、ふと聞こえてくる鳥や獣たちの鳴き声が変わっている事に気付いた。

怯えている？

何かが起こっている？ 頭上を様々な鳥が森の外へと飛んでいくのが見えた。

最悪の事態が脳裏をよぎる、僕はそれ振り払うように森の奥へ走り出した。でこぼこした道に足を取られ、鋭利な葉で手や頬に傷が出来たが構うものか、彼女は確かにここにいる。

早く、早くこの森を出なきゃ、ここはダメだ、ここは人が土足で入り込んでいい場所じゃない。

ふと走る僕の耳にちりん、ちりんと小さな鈴の音が飛び込んできた。それは嘗ての飼い猫ガットの首輪の音。

「っ！ ガットいるのか！？」

鈴の音のほうへ走ると突然眼前が開けて目の前に小さな泉が広がり、その淵で歩き疲れた足を水につけて休んでいるレティとその隣に佇むガットの姿を見つけた。

「レティっ！」

名を呼んで駆け寄るとレティは驚いたように軽く眼をむいて慌て

たよつにあたふたした。

「……ドルフ?! ど、どうして?」

「どうしてはこっちのセリフだよ! 何で一人でこんな所まで?!」

「そ、それは……言えないっ」

目線を泳がせながらもそうはつきり言つと気まずそうに僕から顔を背けた。

「ああもつっ、理由は後でじっくり聞かせてもらつから今は早くここを出るんだ!」

レテイの腕を掴み立たせると一瞬怯んでいたレテイははつとして抵抗するように身を後ろに引いた。

「ま、待つてお願い。まだ見つけてないの、私まだ戻れない。どうしても、どうしても火焰草が必要なの!」

「薬草と命どつちが大事かなんて言わなくてもわかるだろう! お願いだから諦めてレテイ、ここがどんなに危険な場所か君は知らないんだっ」

「じゃあ、ドルフは知ってるって言うのっ?」

レテイは首を横に振り抵抗を一層強め僕の手を振りほどき、その目に涙を溜めながら僕を睨んだ。たった二歩の距離、僕は何も答えられずレテイから目を背けた。

それを見たレテイは唇を噛み締め涙を堪えながら叫ぶように言った。

「ドルフはずるいよっ、ずっと一緒にいるのに何も教えてくれない。言いたくないならそう言ってくれればいいのに、それさえ言ってく

れない。今だつてそう！ あなたはこの森を知ってるんでしょう？
なのに黙ってるだけ、否定も肯定もしないっ」

「レテイ、お願い落ち着いて、僕はただ……」

「ドルフは卑怯だよ、自分の事は全部隠して私が何を聞いてもそう
やってはぐらかす！ もう、私はドルフが何考えてるのかわからな
いっ」

レテイの眼から堪え切れなかった涙が溢れ出した。悔しそうに悲
しそうに顔を歪めて泣く彼女にかける言葉が見つからない、二歩の
距離が近いはずなのにまるで壁があるみたいに動けない。

レテイは涙を拭いながらも僕をまっすぐに見つめた。

「嘘も誤魔化しももうたくさん！」

力強い眼差しが僕には眩しく見えた。

僕は息苦しさを感じ胸元へ手を伸ばし目を閉じた。彼女に嘘など
付いた事はないけど真実を言っているなんて口が裂けても、言えな
い。

僕は一度だけ嘲笑を浮かべてから目を開きまっすぐに見つめ返し
言った。

「レテイ、僕は君が大事だ、この世の何よりも君が一番に大切な
だ」

「……ドルフっ」

二度目の驚きにレテイが一瞬呆けた好きに一気に間を詰めレテイ
の二の腕を掴んだ。

「約束するよ、君に何もかも話すって、だから今は僕の言う事を聞

いてっ。この森は危ないんだ、見つかる前に出ないと」

「見つかるって何に？」

「説明は歩きながらするから急いで！ ガットお前は自分で歩けよっ」

レティに靴をはかせ僕らは不満そうに歩く黒猫を従え急いで来た道に戻り始めた。

第七話

いつものようにレティの荷物を背負う僕。
僕の前を歩かない、いつもと違うレティ。

僕の愛した平凡な日常が音を立てて崩れてゆくのが聞こえる。きつと、もう戻れない。

「ドルフ、一体なんだって言うのよ！ 見つかるって何に？ ねえ、話してくれんじゃないの!? この森に何があるっていつの？」
小さく後ろを振り返ると不安そうに僕を仰ぎ見るレティと目が合った。僕はギリッと奥歯を噛み締める。

ああ、もう少しだけ彼女の側にいたかったんだ。

だから、気付かないふりをした。僕の気持ちも、彼女の気持ちにも目を背け続けた。それが間違いだと知っていたけど、僕はそれさえも気づかないふりをした。卑怯な僕。

僕は自嘲気味な笑みを浮かべた。もう、潮時なのかもしれない。

「ねえ、レティ、ちよつと昔話をしようか……」

「は？ ちよ、昔話って」

僕はレティの声を無視して話し始めた。

これは遠い昔、世界がまだ神話の時代。人と悪魔の熾烈な争いの物語。

突如、『十二の悪魔』がこの世界に降り立った。人々が悪魔の存在に気付いた時には、もう手遅れで、世界は暗黒に包まれようとしていた。

十二の悪魔は、大地に根を張り高らかに笑い声を上げ、その声を聞いた者たちが次々と命を落としていった。人々は悪魔の暴虐に立

ち向かう為に、『十二の賢者』に救いを求めた。

賢者たちは願いに応えて、悪魔に立ち向かう。

刃と知恵、暴力と正義とが闘ぎ合う……長い戦いの中、悪魔に致命傷を与えること出来ず、賢者たちは傷つき最早戦えぬと悟ったその時、一番若い賢者が言った『悪魔を封印しましょう、それしかない』、そして、十二の賢者はその命と引き換えに悪魔をその身に封印することに成功した。

彼らの軀は、故郷へ運ばれさらなる封印のなか永遠に眠る、後に彼らの子孫が二度と悪魔が復活せぬようにその地を護った。

そうして、世界は尊い犠牲の下で平和を取り戻し、人々は悪魔と賢者の戦いを忘れ去った。

「そして、その一番若かった賢者の名前は『アルベール・フロガ』、この森は彼が眠る地で……僕の故郷だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9496n/>

庭師と魔女

2011年6月10日11時04分発行